

〈書評論文〉

国家装置の中の女性の発見

—— 中華人民共和国における社会主義フェミニズム革命 ——

Wang Zheng,
*Finding Women in the State: A Socialist Feminist
 Revolution in the People's Republic of China*
 (University of California Press, 2017)

劉 恒 宇

1 はじめに

社会運動、社会思想と結びつきやすいフェミニズム理論は、通常、国家とはあまり親和性を持たないように感じられている。なぜかという、国家と家父長制の共犯関係の暴露が一つの重要な課題として多くのフェミニスト論者によって行われてきたからである。さらに、国家自体をジェンダー化された、男性中心的な権力装置として捉える論者も少なからず存在する。

しかしながら、1980年代からジェンダー平等を実現する上での国家機構の役割が多くの関心を集め、それによって、「国家フェミニズム (State feminism)」という分析概念が世界中で広がった。Amy G. Mazur and Dorothy E. McBride (2007)によると、この概念は最初、国のジェンダーイシューをめぐる政策を指す曖昧な概念ではあったが、段々女性政策機関と関連付けて使用されるようになり、さらにはRNGS (Research Network on Gender Politics and the State) に属する、ジェンダー政策の比較研究をする学者たちによって、操作的な比較概念に発展した。

研究者の関心と視点の多様性によって国家フェミニズムに対する概念も異なるが、基本的には、国家フェミニズムは、女性の地位向上を取り扱うナショナル・マシーナリー

(National Machinery) による活動に焦点を当てる。国家フェミニズム概念の発展と普及には、西欧、北米、オーストラリアにおけるフェミニスト経験研究を行う学者たちの功績が大きいが (Mazur and McBride 2007)、近年、国家フェミニズム概念を用いるアジアのフェミニスト研究も次第に増えてきた。戦後労働省婦人局 (あるいは婦人少年局 1947-1984) の活動を考察した Yoshie Kobayashi (2004) の著作 *A Path Toward Gender Equality: State Feminism in Japan* は初めて国家フェミニズム概念を用いた、非西洋地域を対象とする著作といわれる。Kobayashi は国家フェミニズム概念のアジア・アフリカ地域のフェミニズム研究に対する重要性を認めるものの、その限界も指摘している。西洋地域を考察対象とする国家フェミニズム理論は政治的・社会的影響力の大きい国内フェミニスト団体の存在を前提として、国家機構とフェミニスト団体の連携に着目している。そのため、これをフェミニスト運動がそれほど発達していなかったアジア・アフリカ社会に応用する際に理論枠組みの再構築が必要であると Kobayashi はいう。Kobayashi は男女雇用機会均等法の制定、改定される過程における、労働省婦人局の活動実態を明らかにして、これを国家フェミニズム理論で分析するために、社会運動研究のフレーミング論の視点を導入した。それによって、ジェンダー平等を実現するための政策制定過程を「国内フレーム」と「国際フレーム」から分析することができ、西洋における国家フェミニズム研究に対する理論上の修正を行った。Kobayashi の研究は国家フェミニズム理論をアジア地域に応用することによってそれを発展させることができた点で先駆的な研究ではあるが、これはまだアジア地域における国家フェミニズム研究の端緒を開いたばかりであり、国家フェミニズム理論はアジア内部の地域ごとのユニークな歴史、文化に沿いながら更に精緻化する必要があると思われる。なぜなら、女性官僚あるいは「女性問題」に取り組む国家機構を主な考察対象とする国家フェミニズム研究の展開は考察対象を取り巻く社会・政治の状況によって拘束されているからである。そのため、考察対象の時間的・空間的位置づけによって国家フェミニズム研究は異なる課題に直面するかもしれないし、それぞれの文脈に沿いながら、理論を精緻化することが求められている。

本書は初めてアジア社会を対象とした Kobayashi の試みに次ぐ、中国を対象とする国家フェミニズム研究である。同じアジア社会の中にある中国を考察対象とする本書は、Kobayashi による日本の研究と類似するジェンダー秩序における問題性を曝露した (例えば政治体制における女性部門の周縁性と従属性) 一方で、またそれとは異なる、社会主義中国におけるフェミニズムの特有の問題性を明らかにしている。本書は中国社会主義革命という時期において、フェミニズム活動に関わっていた、フェミニストと名乗らない、あるいは名乗れない「フェミニスト」たちの戦略を分析するために、「隠蔽の政治 (a

politics of concealment)」という鍵概念を用いる。社会主義時代の中国において、フェミニズムに関するアジェンダを設定する際に直面する困難は以下の三点として指摘することができる。第一に、女性の地位向上の指標を社会参加率の上昇に矮小化する傾向。こういう観点は各組織・集団内部における女性の周縁的、抑圧的な地位を批判することを困難にする。なぜなら、こういう観点を持つ人からみると、社会主義時代の中国で、女性の地位向上はすでに実現されたので、それ以上男女の不平等といった主張を押し通すと、階級闘争という社会主義中国の問題の核心を男女両性の闘争に逸らす危険性があるからである。第二に、政治状況の変動が激しくて、言葉の使用に注意しないと、政治闘争に巻き込まれる可能性があり、明白なフェミニスト・アジェンダ設定は政治体制における女性部門や女性官僚自体に危険を招く可能性がある。第三に、冷戦期がもたらした特殊な国際秩序は、社会主義国家以外の国からフェミニズム運動の経験を学ぶことを阻害する。上述のように、フェミニスト・アジェンダを推進するためには、フェミニストたちは自分のフェミニズム志向を隠さざるをえない状況に置かれている。これを受けて、女性官僚たちは自分のフェミニスト目標を共産党のアジェンダに組み入れることで女性の地位向上をめぐる活動の正当性と資源を獲得した。このような、党の言説を保護色としてジェンダー・イシューを進める女性官僚の戦略を Wang は「隠蔽の政治 (a politics of concealment)」と呼び、本書はこれに関する典型的な例をたくさん紹介している。「隠蔽の政治 (a politics of concealment)」を通して、女性官僚たちは身を守りながら女性の地位向上に関して一定の成果を収めたが、逆に女性官僚の主体性を歴史から抹消する結果を招き、国家装置の一部と思われる受動的な存在として誤認される。本書の主な目的は、豊富な資料に参照しながら、こういうフェミニストたちの言説、作品に対する綿密な分析を通して、当時、水面下で推し進めるフェミニスト・アジェンダを明らかにし、歴史から抹消されたフェミニストたちの主体性を再発見することである。

本書の著者 Zheng Wang (王政) は 1985 年にアメリカに留学して歴史学を専攻し、中国ジェンダー史を専門とするタニ・バーロウに教えを受け、本書を出す際にはミシガン大学の女性学・ジェンダー研究所に所属している。Wang は中国女性学研究所の「国際派」(秋山 2001: 44) の代表的な学者であり、欧米の女性学研究所を中国で紹介しながら、フェミニズムの視点から中国の女性史を再考することに取り組んできた。

2 中国社会主義女性解放運動史に対する批判的再考

社会主義時代の中国女性解放運動については、国家に主導されたトップダウン型の社会

運動として捉える研究が蓄積されてきた。一方で、国家機構を一枚岩の男性中心集団として捉えるのは妥当だろうか、あるいは女性たちはただ受動的に国家の指示に従う存在でしかないのだろうか、といった問題は、長い間アカデミズム界で不問のままであった。そのため、社会主義時代の中国女性解放運動には、国が積極的に女性のために代弁し男女平等を促進する一面と、国が父権主義と妥協しながら女性を周縁化する一面が並存するという両義性が見える。社会主義時代のフェミニズム運動を「国家（男性中心）による女性の解放運動」として捉える視点は、その歴史的な経路の複雑性を過小評価する恐れがあり、女性フェミニストたちの業績を歴史の中から抹消する危険性もある。それに対して、本書の書名にある通り、Wang は社会主義時代の女性官僚フェミニストたち(女性共産党員)が様々な制限の中で、巧妙な戦略を駆使しながら家父長制主義と闘う現実を入念に素描することを通して、「国家が主導する社会主義フェミニズム運動」の歴史に忘却された女性官僚たちが残したレガシーを掘り下げた。

また、Wang はトップダウン/ボトムアップという二元的なモデルを超えるフェミニズム運動の捉え方を試みた。それは実は研究対象となる女性官僚フェミニズムたちの立場の特殊性と深く関連する。例えば本書の第一部で紹介した女性幹部たちが所属する中華全国婦女連合会（以下 ACWF という）⁽¹⁾ は中国の女性を代表する唯一の全国組織であり、公式文書の中で「大衆組織」として定義づけられているにもかかわらず、共産党の指導を受けなければならない。そのため、中華全国婦女連合会は政府内部に所属する組織でも、完全に政府から自由になる独立な組織でもなく、非常に特殊な存在となる。そこで働く女性官僚たちは政府からの指示に基づいて女性を組織、動員する任務が課される一方で、女性の権利を主張し、女性の地位向上を目指すフェミニスト的志向もあり、国家と一般の女性市民の狭間にいる流動的な存在である。本書はまさにこのような狭間にいる女性フェミニストがジレンマから脱出するために使った戦略に焦点を当てている。

本書は以下の二部から構成される。第1部の「婦女連合会と中国共産党」（第1章-第4章）において、Wang は中華全国婦女連合会の女性官僚に光を当て、彼女たちが婦女連合会の正当性または女性の権利を保証する過程で遭遇した挫折や、挫折を乗り越えるために使用した戦略を詳細に検討している。第2部の「フェミニスト文化革命から文化大革命へ」（第5章-第8章）において、Wang は社会主義時代の文化表象に焦点を当てて、フェミニストたちが農村女性を啓蒙するために、映画創作における工夫を分析し、ジェンダーの文化表象をめぐる権力関係と政治性を喝破した。

⁽¹⁾ 中華全国婦女連合会の組織構造に関しては、李妍淑（2014）の論文で詳しく紹介されている。

本稿の3節において本の第1部の内容を、第4節において本の第2部の内容を要約し、第5節で考察を行う。

3 婦女連合会と中国共産党

男性主導の政治状況における ACWF の「生存戦略」という主題は、本書の第一部を貫いている。Wang は ACWF が経験した四つの挑戦/危機に焦点を当てて、その危機を乗り越えるために女性共産党員が限定された乏しい言説資源から慎重に言葉を選び、自分の武器として家父長制主義と戦う「舞台裏」の様相を丹念に描いた。

まず Wang は中華全国婦女連合会の地方組織：上海婦女連合会の新中国成立後の活動を事例として、政治環境が相対的に安定していた新中国初期における女性組織が他の政府アクターとの相互作用、および流動的な緊張関係を描いた。新中国初期の言説空間は相対的に寛容であったため、女性共産党員たちが五四運動のフェミニズムの言説資源を受け継ぎながら、エンゲルスの女性解放理論も援用し、男女平等のアジェンダを推進した。しかしながら、五四運動で広がった個人主義の色彩が強いフェミニズムの言説は社会主義解放論を掲げた一部の人から見ればブルジョワ・フェミニズムの表現であるため、時間が経つにつれて、段々正当性を失い、社会主義とは相克する危険思想へと転化した。政治状況の更なる変化によって、女性の権利を主張することと家父長制を告発すること自体が「反社会主義革命」思想として糾弾されるようになった。女性共産党員たちが直面する難題は言説面だけにあるわけではない。新中国初期に、ACWF は女性の組織、動員、教育といった様々な面で重要な役割を果たし、多くの業績を残した。しかし、女性問題は少しずつ改善されるに伴って、一部の男性官僚にとって周辺的な問題となった。また、実際の活動において、婦女代表会をはじめとする ACWF の基層組織と政府内部の男性中心的な組織との間には、しばしば競争関係が形成され、前述した男性官僚による女性問題への軽視という側面と相まって、ACWF の一部の基層組織の存在価値自体が危うい状況にあったそこで、せっかくできた ACWF の基層組織を政府の傘下に従属させるあるいは廃止する声が高まるようになった。それに対して、女性共産党員は今まで使用してきた言説戦略を切り替え、ブルジョワ・フェミニズムと思われがちな言説資源を放棄し、代わりに、全ての女性差別あるいは家父長制主義の言動を「封建主義」という政府側の言葉を借りて糾弾するようになり、同時に、他の政府組織と差異化するための言説戦略を行った。例えば、一部の女性共産党員は女性組織が一般の組織と違い、残存した封建思想と絶えず戦ったり、無知な女性を啓蒙したりすることを担っているという、一見「女性による女性差別」と誤解されがちな言

説を使いながら、女性組織の価値を強調していた。

第2章で Wang は ACWF の 1957 年の保守的な方向転換に着目した。それまで、ACWF は男女平等を基本的な指針として、婚姻法の制定、女性教育の推進、女性の経済的自立の促進といった様々な課題を取り上げてきた。しかしながら、1957 年に、ACWF は突然「勤儉建国、勤儉持家」というスローガンを掲げ、女性の家庭内での役割を強調する今までと真逆の方針に切り替えた。Wang は放置されていた ACWF のアーカイブと ACWF の女性官僚の伝記を手掛りとして、1957 年に ACWF 方針の急変の経緯を追った。まず挙げられる要因は 1957 年の反右派闘争という運動である。反右派闘争は知識人による共産党への批判に対して危機感を感じた毛沢東が発動した「ブルジョア右派」に対する弾圧活動であり、このような厳しい政治情勢の中では社会に対する批判的な意見を表すこと自体非常に危険な行為となる。そのため、ACWF がそれまで使ってきた言説戦略は有効性を失い、男女不平等を告発することが政治的に正しくないと思われる可能性が高い。しかしながら、男女不平等の是正が唱えられなくなったら、ACWF の存在意義もなくなる。そこで、女性共産党員たちは毛沢東が講演で使った「勤儉節約」という文言もとに、「勤儉建国、勤儉持家」の方針を打ち出し、同時に、家事労働の価値を称揚する課題を前景化した。

第3章で Wang は ACWF の機関誌：『中国婦女』を文化戦線として定義し、女性官僚たちがそれを利用してフェミニズムのアジェンダを水面下で推進する様子を描いた。女性官僚たちは農村女性をはじめとする下層女性にポジティブな意味を付与し、彼女たちをメインビジュアルとして積極的に取り上げていた。また、伝統的な性別隔離観念を斥けるために、女性の男性支配的な領域での活躍を大々的に宣伝した。さらに、編集者たちは女性たちの悩みに耳を傾ける「大衆路線」を取り、女性読者の投稿を集め、女性読者たちの声を借りながら、家父長制主義に対する間接的な告発、攻撃を行った。例えば共産党員である夫の不倫行為を告発する女性の投稿を取り上げ、これを「ブルジョア的個人主義」として批判し、一部の男性共産党員の共産主義道徳の低下を譴責した。続いて第4章で Wang は男性共産党員が『中国婦女』に対して反撃した事件を取り上げ、女性の政治体制における周辺的、従属的な位置を暗示するものだったという。女性官僚たちが性差別を解消するための努力は、階級意識の欠如と女性解放を階級闘争から独立させる政治的な過ちとして非難され、資本主義、修正主義への後退というラベルさえ貼られた。

4 フェミニスト文化革命から文化大革命へと

本書の第二部は主に社会主義時代の映画における女性表象とその裏舞台に関する考察と

なる。建国初期の中国の全国の識字率はまだ低かったため、映画は国の政策の宣伝道具のみならず、国民を啓蒙、教育するという重役も担っていた。無料の露天上映が全国各地で行われ、それまでごく一部の人がしかアクセスできなかった映画は全国の国民に扉を開いた。しかしながら、社会主義時代の映画をただのプロパガンダの道具として捉える従来の研究と異なり、Wang は映画の女性表象とそれに関わったフェミニスト制作者の生活史に対する分析を通して、今まで見落とされたフェミニズム視点を導入した。第5章では上海のスターから共産党員となり、後ほど電影委員会の副主任となった女性左翼芸術家：陳波児の生活史の展開によって、社会主義時代の映画における下層女性の主体性の形成過程が描かれた。陳波児は従来の下層女性に関する受動的な被害者表象を打破し、主体性のある、社会進出する強いヒロインのイメージを作り出し、伝統的な性別隔離意識に対しても強い影響力を持つと考えられる。そのような新しい女性イメージを作るために、陳波児は「下生活」という、映画製作チームが農村の下層群衆と一緒に生活しながら創作する手法を取り、できるだけ農村女性の生活を如実に反映しようとした。このような仕方では、陳波児は都市の知識人女性に啓蒙されたり、教育されたりするような無知の農村女性のイメージを刷新し、自分の意志で主体的に社会で活躍する、ポジティブな農村女性を表象することに成功した。第6章には本書の中で唯一の男性フェミニスト：中国の劇作家、映画シナリオライターである夏衍が登場する。建国後、夏衍は映画、演劇界での指導的地位につき、陳波児の理念を共有し、「下生活」というフィールドワーク的な文化創作方法を受け継いだ。Wang は夏衍が制作したシナリオの中の女性主人公の表象を分析し、下層女性に主体性を付与することで彼女たちをエンパワーし性別規範を転覆させたと夏衍の業績を評価した。政治の風向きの急変によって、夏衍は政治的運動で迫害を受け、芸術界の指導的地位から転落したが、第7章はその後を継いだ、毛沢東の夫人である江青の活動をめぐって展開されている。芸術界での主導権を獲得した江青は、夏衍によって生産された映画を非難、禁止し、階級闘争を反映させるような革命模範劇を手掛け、また異なるヒロイン像を創出した。ヒロインの主体性の重視および公領域での活躍といった点では、江青は陳波児と夏衍と同じ理念を共有しているが、ジェンダーに関する論点に全く触れないところは江青の作品の一番の特徴といえる。例えば江青の作品におけるヒロインは私領域のことが言及されることが少なく、マスキュリニスト的な価値に服従する傾向が強いと指摘される。それについて、Wang は江青が中国の政治システムの周辺的地位に置かれていた経験と彼女自身が女性性を軽視しているということと関連すると指摘した。第8章は今までなされてきた社会主義時代における女性表象の男性化批判に対する批判的再検討である。その代表的な例は「鉄の娘」イメージである。「鉄の娘」は1964年の「大寨に学べ」という全国的な政治キャンペー

ンで全国に知られた若い女性労働模範のことである。それをきっかけに、全国各地の各業界に「鉄の娘」と呼ばれる女性労働模範が続出し、各メディアで大々的に取り上げられることによって、「鉄の娘」は段々政治的な意味を帯びるようになり、毛沢東の「男と女はみな同じである」というスローガンに呼応するような「文革期ヒロイン」（金 2006）の記号となった。1980年から、改革開放政策の浸透によって、中国の階層とジェンダー秩序が再編され、社会主義時代の女性模範として称揚された労働階級の「鉄の娘」は女性らしさを無視する時代錯誤の象徴へと転化した。特に一部の都会のエリート男性による「鉄の娘」に対するバックラッシュが高まり、「鉄の娘」を男性化した変異体としてあざ笑う男性知識人さえいた。それと同時に進行するのは「女性性の回復」を唱える性的差異の再強化傾向である。例えば、Emily Honig と Gail Hershatter（1988）の研究によると、1980年代から、中国で男女の生物学的な性差を強調する科学的な言説が多く生産された。しかしながら、本書および金一虹（2006）の研究によると、当事者としての「鉄の娘」たちは自分たちが男性化された女性とは認識せず、代わりに男性と同じように社会で活躍することを誇りに思っていた。Wang は「鉄の娘」のスティグマ化に関して、毛沢東時代のイデオロギーへの反発、エリート男性の男性性の回復への願望、女性エリートの低層女性との差異化願望を要因に挙げている。

5 考察

5-1 重要な視点

前述のように、本書は社会主義時代の女性官僚フェミニストたちが自分のフェミニズム志向を隠し、フェミニズムのアジェンダを男性主導の政策、運動に融合したことを「隠蔽の政治（a politics of concealment）」と呼んだ。建国後、これらの女性共産党員たちは公の場で自分がフェミニストであることを主張したことは一度もなかったが、代わりに権力のある男性指導者の言説を自分の保護色として利用したり、男性主導の運動に乗ったりして、フェミニズム運動を識別されない形で推進していた。しかし、このような操作は、女性官僚フェミニストの業績を歴史から忘却、消去することと繋がっており、フェミニズム運動に対する理論的な貢献が乏しいという側面もある。そのような政治情勢に束縛されたため、世界規模で広がった第二波フェミニズム運動も中国には及ばず、「ジェンダー」という重要な分析概念の受容も日本と比べると遥かに遅かった。そのため、80年代以降は男女の生物学的な性差を強調する言説の氾濫や「婦女回家」の提起など、フェミニズム以前へと逆戻りするような様々な現象が生じた。

本書は中国の社会主義時代の女性解放運動を一元的な党国体制という枠組みで捉える視点への反発でもある。女性組織は政治システムの周辺的な位置に置かれていたのは事実であっても、国家と女性の関係はただ支配-被支配という単純な関係ではない。女性官僚たちは国家と女性大衆を連結する流動的な媒体であり、国が出した女性政策は常に女性官僚たちによるネゴシエーションが媒介しているということは忘れてはならない。しかも、それは中国ならではの特殊の現象でもないだろう。前述で紹介した Kobayashi の本も国家機構の内部にいる女性官僚がジェンダー平等を推進する際に社会の様々なアクターと交渉するプロセスを浮き彫りしている。また、女性官僚の数とは関係なく、女性官僚たちが政治体制の周縁的な地位に置かれることや政治体制における「女性部門」の存在意義が常に問われるといった事態は、Kobayashi の本で描かれた戦後まもなくの日本と Wang が描いた社会主義時代の中国の共通している問題である。今年日本の総裁選においては、初めて複数の女性候補が立候補した。それはフェミニズムの視点から見れば、どのような意味があり、これからのジェンダー秩序の変化の方向性に対してどのような影響が予測されるのだろうか。こういう政治領域に見られるジェンダー構造をめぐる新しい動向や現代社会における女性と政治の関係を考察するためにも、国家フェミニズム研究が残したレガシーを掘り起こし、再び注目する必要がある。

本書は歴史の連続性も重視しており、社会主義時代のフェミニズム史のみならず、それが転換期における中国に与える影響も視野に入れている。社会主義時代に行われた広範囲の運動、キャンペーンの有効性と合理性を失った一方で、新たな形の運動形式が誕生した。Wang は本書の最後で、中国の最近のフェミニズム動向を紹介している。転換期における中国のフェミニズムは、主にアカデミズム界とソーシャルメディアを舞台としている。特に若者世代によって担われるソーシャルメディアでのフェミニズム運動に対する関心が多く寄せられ、トランスナショナルなフェミニズム運動と連動する新たな可能性を潜んでいる。同時に、フェミニズム運動をスティグマ化する動向もあり、それに対抗するために、若者たちは社会主義時代のフェミニストたちが作った女性像を復活させたり、自分がフェミニストであることを積極的に主張したりして、フェミニズム運動の新たな地平を拓いている。

5-2 日本のフェミニズム研究に対する示唆

本書が提示した中心的な概念：「隠蔽の政治 (a politics of concealment)」は日本のフェミニズム研究にとっても有効性があるのではないだろうか。言説規制が厳しい時代やフェミニズムに対するバッシングが激しい時期において、フェミニストがどのような言説戦略

を使ってフェミニズムのアジェンダを推進しているのかに関して、再考する必要があるだろう。

女性の社会参加と女性解放との同一視も警戒する必要がある。女性の社会参加は男性と平等の権利を獲得したとして理解されがちだが、女性の社会参加は常に新たなジェンダー秩序の編成に随伴し、ジェンダー不平等を気づきにくく隠蔽する。中国の女性の社会参加の頂点は社会主義時代にあったが、本書が示したように、女性たちを周辺的な地位に追い込む状況も常にある。社会主義革命は女性を解放するというテーゼは女性の社会参加率を主な評価基準として設定するため、逆にジェンダー・バイアスを告発することを困難にして、ジェンダー平等社会の実現に支障をきたす。日本も1985年の男女雇用機会均等法をはじめとする女性の社会参加を促進する一連の法律を実施したが、結局、「さまざまな差別的な規制や構造はそのまま放置あるいは悪化させられ、一方で一定の条件下の女性のみ『活躍』させられ」（菊地2019:64）、同時に「日本社会では『女性差別はなくなった』というイメージが醸成され、『にもかかわらず“女性は差別されている”というプロパガンダを唱えるフェミニズム』への反感が生み出されている」（菊地2019:81）。「男女平等」の中の「平等」の意味自体に関しては、具体的な社会状況に応じながら常に問わなければならないと思われる。

最後の示唆は言葉を持つことのフェミニズムにとっての重要性である。本書は社会主義時代の政治情勢に左右されるゆえに「フェミニズム」を表現することの不可能性を描いた。日本のフェミニズム運動は中国とは異なる形の表現の不可能性あるいは難しさが存在する。まずは他のマイノリティとのせめぎ合いである。例えば、60年代に日本のウーマンリブ運動で提起した「産まない権利」という女性の主張と障害者運動で提起した「生まれる」権利が衝突して、女性の生殖の自己決定権を強く前面に出すことが難しかった。そして、現在のフェミニズム運動では、「女性」という属性を強く強調すると、性的マイノリティの排除と繋がるので、なかなか難しいという事例も菊池（2019）の研究で明らかになっている。もう一つは、フェミニズム自体がスティグマ化されたため、フェミニストを自認することに警戒している人もいる。そのため、フェミニズムの運動史やフェミニストの業績を再評価することと、ポジティブな意味を持つフェミニズムの言葉の創出が期待されている。

参考文献

- 秋山洋子, 2001, 「王政『啓蒙期の中国女性』」『中国女性史研究』10: 44-7.
Honig, Emily and Gail Hershtatter, 1988, *Personal Voices : Chinese Women in the 1980's*, Stanford

University Press.

菊地夏野, 2019, 『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』 大月書店.

金一虹, 2006, 「“鉄姑娘”再思考——中国文化大革命期间的社会性别与劳动」『社会学研究』21 (1): 169-96.

Kobayashi Yoshie, 2004, *A Path Toward Gender Equality: State Feminism in Japan*, New York: Routledge.

Mazur, Amy G. and McBride, Dorothy E., 2007, “State Feminism since the 1980s: from loose notion to operationalized concept.” *Politics & Gender*, 3 (4): 501-13.

李妍淑, 2014, 「中国のジェンダー法政策推進過程における婦女聯合会の役割 (1)」『北大法学論集』65 (2): 437-94.

(りゅう こうう・博士後期課程)